

2008年秋のアユの生育環境

酒井 明久

◆背景・目的

秋の琵琶湖の環境は、アユの初期減耗や成長の程度に影響を与えられと考えられる。そこで、2008年秋のアユの生育環境を評価する目的で、プランクトン量や水温および強熱残留物（濁りの指標値）を測定した。

◆成果の内容・特徴

- ・2008年9月下旬から11月中旬にかけて、姉川-安曇川ライン上に設けた4定点において(図1)、水深0-20m層の動物プランクトン密度と水温および強熱残留物の鉛直分布を測定した。
- ・動物プランクトン密度は、コペポディッド期以降のカイアシ類とノープリウス幼生およびミジンコ類で異なる挙動を示した(図2)。
- ・2008年秋には本県への台風の接近はなく、強い濁りは観測されなかった(図3)。

◆成果の活用・留意点

- ・観測データは、アユの成長や生残の年変動を検討するための基礎資料となる。

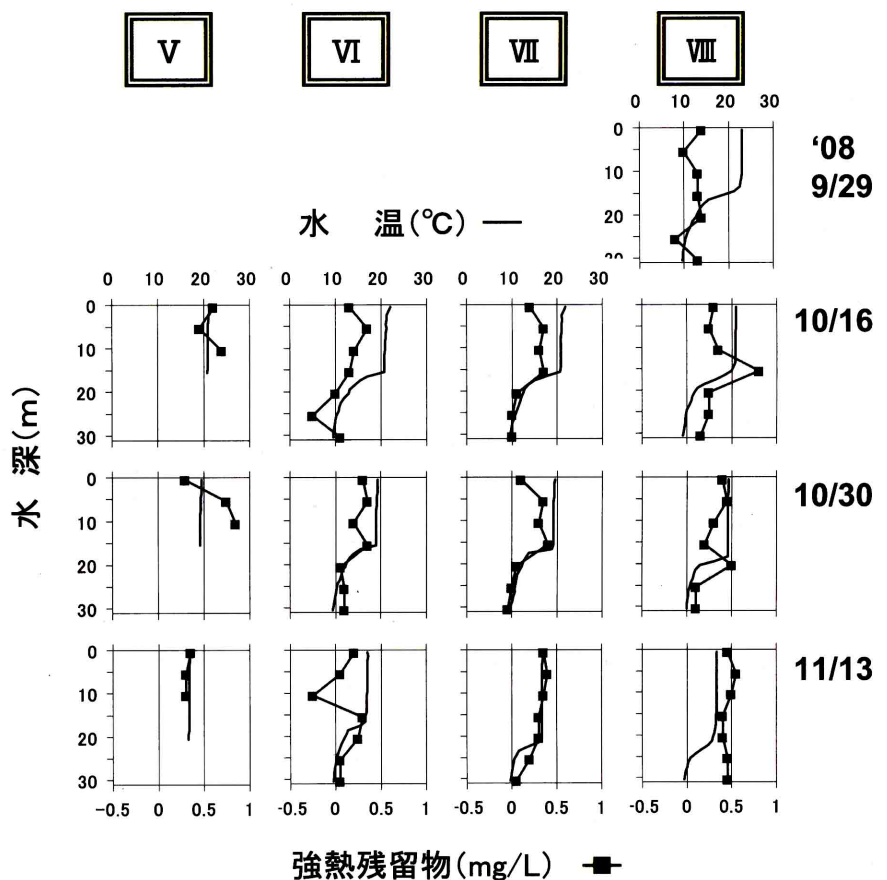
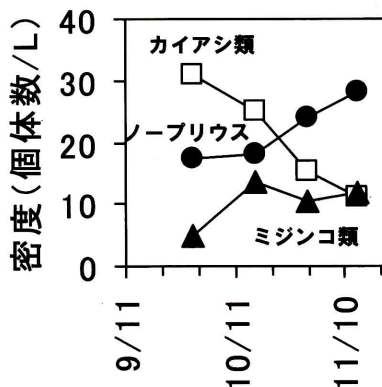


図2 定点VI-Ⅷにおける動物プランクトン密度の動態

※本研究は、(独)水産総合研究センター委託事業、平成20年度「遺伝的環境ストレス指標による地域資源の健康度診断法の開発」により実施された。